

大和総研の働き方教室 第2回

2018年1月31日

全2頁

企業が授業を提供する意義（その2）

大学の理想像をイメージし、できることから始めよう！

調査本部 副部長 宇野 健司



企業だからこそ、できる教育的貢献とは、どのようなことでしょうか。

- ①「講義」だけではなく、「ディスカッション」も。
- ②「学究」だけではなく、「実学」も。
- ③「授業」だけではなく、「授業外」も。

この3点の問題意識を持って、大和総研では授業を組み立てています。

そして卒業生に、「10年保証」&「10年サポート」&「10年後の学び直し」と、10年サイクルで「長期的な教育価値」を提供するのが、大学の理想像ではないかと考えています。

①「講義」だけではなく、「ディスカッション」も

近年、ディスカッションをベースにしたアクティブ・ラーニング型の授業を実施する大学が増えています。学生が受け身ではなく、主体的に授業にかかわり、自分の意見を集団の中で、堂々と発言する力を育成するものです。大和総研の提供する授業も、このスタイルです。

やってみると分かりますが、学生にとって、とても刺激的な授業となり、他の学生の発言にも触発され、前向きな学習意欲が芽生えるものです。

大学の教育プログラムの一部に、このような授業を企業が提供することで、学生の主体性・社会性・コミュニケーション能力などを引き出すのが望ましいのではないかと思います。

②「学究」だけではなく、「実学」も

大学は、学究の場であるとともに、良き社会人を世の中に送り出す場でもあると思います。どちらかだけというのではなく、バランスの問題でしょう。例えば、全体のカリキュラムの内、1割程度は、実学に近い実践プログラムも取り入れて、あとは学生が主体的に選べるようにするのが、社会のニーズに照らしても、好ましいと考えます。

実務を経験している社会人が、現実に即した示唆を与えることで、普段は得られない気付き

も、学生は実感できるでしょう。これらは、企業だからこそ、できる教育的貢献だと思います。

③「授業」だけではなく、「授業外」も

当社が提供する30人のクラスでは、ディスカッションの司会をやってくれた学生3人と、次の授業日のお昼にお弁当を持ち寄って、ランチを一緒にするようにしています。もちろん自由参加です。

ポイントは、1対1で話を聞くこと。学生3人ですが、話は1人ずつ、順番に聞くようにしています。そして、説教はしない。でも個人的な感想や示唆を与える。あとは自分で考えてもらう方向に導く。キーワードは、「自分では、どう思うの?」。人は納得しないと、自ら行動しないと思うからです。

まともな社会人が、ニコニコしながら、じっくりと話を聞いてあげて、「この人なら、少しはサポートしてくれそう」という安心感・信頼感を持ってもらうのが、とても大事だと思います。

そして、今後も「10年サポート」する旨を、最後の授業では伝えます。当然、できる範囲で、という意味です。

つかず離れず、適度な距離感で、いつでも相談しやすい関係を、10年間キープする。メールやSNSなどで、季節の挨拶がてら、数ヶ月に一度、メッセージを一斉に流すイメージです。そして相談を持ちかけられた時には、ピンポイントで話を聞いてあげればいいのです。

理想像： 「10年保証」 & 「10年サポート」 & 「10年後の学び直し」

そもそも、大学を卒業するということは、「10年保証」を得たようなものでしょう。大学は、本来、それぐらいの覚悟で「長期的な教育価値」を提供しなければならないと思います。

それに加えて、社会人教員も含めて、可能な範囲で「10年サポート」する。メンターとして、社会の先達として、人間的に信頼できる恩師が複数いるのが、卒業生にとってベストでしょう。試行錯誤の20代の若手にとって、経験豊富な社会人教員の出番も、少なくないと思います。

ゼミやディスカッションを通じた人間関係ができていれば、卒業生も相談しやすいはず。義務ではなく、無理のない範囲で、話を聞いてあげる、というイメージでしょうか。

そして「10年後の学び直し」。卒業生も、10年経ったら、また大学に立ち寄って、学び直す。短期でも、夜間でも、土日祝日だけでも、いいのです。

これらが「大学のあるべき理想像」だと、個人的には思っています。それでは、どのようにして「長期的な教育価値」を、大学は保証すればいいのか。今回は、このことについて、意見を述べてみようと思います。

(次回予告：「大学で身につけるべきスキルとは?」)

以上